

## チュクチ語の結合価の変更について

呉 人 徳 司

(アジア・アフリカ言語文化研究所)

### On the Valency-Changing in Chukchi

KUREBITO, Tokusu

Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa

Chukchi is a language of the Chukchi-Kamchatkan language family, spoken in the far northeast of Siberia, of the Russian Federation. The aim of the paper is to examine the valency-changing processes in Chukchi, and to expand the understanding of verbal morphology of Chukchi.

Chukchi has three classes of verb: intransitive verbs, which inflect only as intransitives, but can be used transitively when they take valency-increasing morphological marking (e.g. *jəlqet* 'sleep'); transitive verbs, which inflect only as transitives, but can be used intransitively when they take valency-reducing morphological marking (e.g. *piri* 'catch'); ambitransitives (or labile verbs) that are inflectable either way, which can be used as transitives and intransitives without morphological derivation (e.g. *mle* 'break').

In this paper, we focus our attention on a morphological process that has both valency-increasing and valency-reducing operations: transitive formation from intransitive verbs, causative, antipassive, and anticausative.

In Chukchi, noun incorporative formation is also related to valency-reducing operation. Object incorporation is the most frequent type. When the object is incorporated into the verb stem, the number of core arguments the verb takes is reduced by one, and the whole incorporative complex predicate takes an intransitive marker. So, we will briefly introduce the noun incorporation of Chukchi.

キーワード：チュクチ語，他動詞，自動詞，逆受動，逆使役，名詞抱合，名詞項

Keywords: Chukchi, transitive, intransitive, antipassive, anticausative, noun incorporation, argument

1. はじめに
2. 動詞の分類
3. 動詞の自・他と名詞項
4. 動詞の使役と名詞項
5. 名詞抱合と動詞の結合価
6. まとめ

## 1. はじめに

チュクチ語<sup>1</sup>はアジア大陸の北東端（ロシア連邦）、チュコト半島およびその周辺地域で話されている言語である。

本稿<sup>2</sup>では、チュクチ語の動詞を結合価の変更の視点から検討することにする。具体的に言えば、文において動詞がとりうる名詞項の増減によって、どのような変化が生じるかということである。具体的なプロセスとして、動詞の他動性の変化（いわゆる自・他の交替）、使役化、逆受動化、逆使役化などが考えられる。これらのプロセスはすべて動詞語幹または形容詞語幹に接辞を付加することによって実現する。また、接辞の付加ではないが、名詞項の減少という点では、名詞抱合もこのプロセスの一つであると考えられることができる。本稿ではこれらのプロセスについて概説し、それぞれの特徴を取り上げることにする。

本稿の構成は以下の通りである。最初に、第二節では動詞がとりうる名詞項の数から動詞の分類を行なう。第三節では自動詞他と他動詞の対応関係を名詞項の増減の観点から述べる。第四節では使役動詞と名詞項の関係について論じる。第五節では名詞抱合と名詞項の関係について述べる。そして最後の第六節では全体のまとめをする。

## 2. 動詞の分類

チュクチ語では動詞がとりうる名詞項の数から、無項動詞（或いはゼロ項動詞）、一項動詞、二項動詞、三項動詞の4種類に分けることができる。自動詞は非派生語幹と派生語幹の2種類あるが、無項動詞と一項動詞のいずれかである。無項動詞は自然現象を表わす非動作主動詞(non-agentive verb)に限られるが、その多くが名詞からの派生語である。

例：jʔet「曇る」（<jʔn「雲」）、ejsyit「波が立つ」（<ejsyn「波」）、ktjyat「風が吹く」（<ktjyn「風」）、piŋet「雪が降る」（<piŋ「雪」）、elerʔu「夏になる」（<elen「夏」）、wemeet「川が解氷する」（<weem「川」）  
一項動詞は名詞項として、主語(Subject)のみをとるが、非派生語と派生語の2種類がある。

<sup>1</sup> チュクチ語は、系統的にはチュクチ・カムチャツカ語族に属する。チュクチ語の話者数は全人口 15767 人の 40.7%を占めている（2002 年現在）。チュクチ人は伝統的に、トナカイ遊牧民と海岸の漁労民に分かれる。この生業の違いで語彙が互いにある程度の違いはあるが、同系のコリャーク語などに比べると方言差が比較的小さい。

<sup>2</sup> 本稿は文部科学省科学研究費補助金（基盤研究(B)、研究課題：『北東アジア諸言語の統合性をめぐる類型的・歴史的比較研究』、課題番号：21401022、研究代表者：呉人徳司、研究期間：2009～2012 年度）から助成を受けている研究の成果の一部である。本稿は筆者が、1995 年から 2009 年までの間に、チュクチ語の現地調査で集めたデータに基づいている。

非派生語の例： *jalyt*「遊牧する」, *ynte*「逃げる」, *wakʔo*「座る」, *jlqet*「眠る」, *ekwet*「出かける」

派生語の例： *emnuŋ-et*「ツンドラを移動する」 (< *emnuŋ*「ツンドラ」)  
*tumy-ew*「友人である」 (< *tumy*「友人」)  
*kry-ew*「衰退する」 (< *kry*「古物」)

他動詞にも非派生語幹と派生語幹の2種類あり、統語的には二項動詞、三項動詞の二種類に分類される。二項動詞は基本的には、動作者(Agent)と非動作者(Patient)をとる。

非派生語の例： *piri*「捕まえる」, *tm*「殺す」, *jp*「着る」

派生語の例： *reŋ-et*「餌をやる」 (< *reŋ*「餌」),  
*ʔejŋe-w*「呼ぶ」 (< *ʔejŋe*「音」),  
*ry-tku*「搔く」 (< *ry*「髪の毛, 体の毛」)

三項動詞は、動作者と2つの非動作者 (theme と recipient) をとるものであり、いわゆる授与動詞のことをいう。

例： *jl*「あげる」, *qewi*「もらう」, *pnr*「渡す」

チュクチ語では、いわゆる両用動詞(double-sided verb)が存在する。これらの動詞は形態的に分化しておらず、自動詞としても他動詞としても使えるが、表層では活用変化により自動詞、他動詞の区別がなされる。

例： *mle*「折れる, 折る」, *ir*「ぶつかる, ぶつける」, *ejp*「塞がる, 塞ぐ」,  
*walom*「聞こえる, ~を聞く」, *rrʔəlet*「動く, 動かす」,  
*winret*「助かる, 助ける」, *tulʔet*「盗む, ~を盗む」,  
*iw*「言う, ~を盗む」, *winret*「助かる, 助ける」

チュクチ語では、動詞が自動詞の主語だけでなく、他動詞の主語と目的語に応じて活用変化をする。従って、動詞に主語のみが標示されていれば自動詞、主語と目的語が標示されていれば他動詞であることがわかり、自動詞と他動詞は形式的に容易に区別される。

### 3. 動詞の自・他と名詞項

自動詞と他動詞の形態的対応関係には、次の3種類が認められる。(派生は接辞の付加による)

- (1) 自動詞語幹から他動詞語幹の派生
- (2) 他動詞語幹から自動詞語幹の派生
- (3) 共通語根から自動詞・他動詞それぞれの語幹の派生

チュクチ語では、自動詞文の主語と他動詞文の目的語が同じ格(主格)をとるのに対して、他動詞文の主語が異なった格をとる典型的な能格構造をもつ言語である。ただし、チュクチ語には能格を示す特別な形式がなく、具格がこの機能を併せてもっている。他動詞文では絶対格をとっていた目的語が斜格に降格(demotion)するか、完全に現れなくなり、一方、能格をとっていた主語が絶対格に昇格(promotion)するという逆受動構文も見られる。

以下ではこの3種類の対応関係について詳しく見ることにする。

#### 3.1. 自動詞語幹から他動詞語幹の派生

自動詞語幹に接頭辞 r-, 接周辞 r-...-et, r-...-ew, r-...-ŋet が付加されることにより、対応する他動詞語幹が派生される。これによって動詞がとる名詞項は一つ増えることになる。

自動詞		他動詞	
pirq	「曲がる」	r-pirq	「曲げる」
eret	「落ちる」	r-eret	「落とす」
atsat	「ひっくり返る」	r-atsat	「ひっくり返す」
ejmew	「近づく」	r-ejmew	「近づける」
tmŋew	「無くなる」	r-tmŋew	「無くす」
went	「開く」	r-went-et	「開ける」
tlw	「焼ける」	r-tlw-et	「焼く」
melew	「治る」	r-melew-et	「治す」
sarajp	「汚れる」	r-sarajp-et	「汚す」
lpuur?	「代わる」	r-lpuur?r-et	「代える」
piŋku	「消える」	r-piŋku-ew	「消す」
pawyo	「揺れる」	r-pawyo-ew	「揺るがす」
wiri	「下りる」	r-wiri-ew	「下ろす」
peqetat	「倒れる」	r-peqetat-ew	「倒す」

paa	「やむ」	r-paa-ŋet	「やめる」
ats	「隠れる」	r-ats-ŋet	「隠す」
ŋpe	「降りる」	r-ŋpe-ŋet	「降ろす」
ŋto	「出る」	r-ŋto-ŋet	「出す」

動詞の活用変化からもわかるように、以下の例では、(1a)が自動詞文、(1b)が他動詞文である。

- (1a) *ŋinqeŋ-Ø*      *ats-ə-yʔe-Ø*<sup>3</sup>  
 少年-絶単      隠れる-3 単主-過去  
 「少年が隠れた」

- (1b) *ŋinqeŋ-Ø*      *t-ə-r-ats-ə-ŋat-yʔan-Ø*  
 少年-絶単      1 単主-挿-他動詞化-隠れる-他動詞化-3 単目-過去  
 「私は少年を隠した」

チュクチ語には受益者を示す特別な接辞は存在しないが、一部の自動詞が他動詞の活用変化をし、受益者動詞として用いられる。以下の例では、(2a)と(3a)は自動詞文であるが、(2b)と(3b)は受益表現である。(2b)と(3b)では、行為者(主語)は能格、受益者は絶対格をとり、動詞は他動詞活用変化をしている。

- (2a) *əllʔa-Ø*      *tipʔejŋ-yʔi-Ø*  
 母-絶単      歌う-3 単主-過去  
 「母は歌を歌った」

- (2b) *əllʔa-ta*      *tipʔejŋ-nin-Ø*      *nenenə-Ø*  
 母-能      歌う-単主 3 単目-過去      子供-絶単  
 「母は子供のために歌を歌った」

<sup>3</sup> チュクチ語には母音調和があり、母音が強母音 /a, eɪ, o, əɪ/ と弱母音 /eɨ, i, u, əɨ/ の2系列に分かれる。一語内に強形態素(強母音を含む形態素)が一つでもあれば、語幹か接辞のいずれかに間関係なく、残りの形態素の弱母音は対応する強母音に交替し *i* → *e*, *u* → *o*, *e* → *a* になり、いわば両方向的なものである。したがって、弱形態の接辞は必ず強の異形態を有する。このようにチュクチ語では、母音調和の引き金になるのはその位置に関わりなくもっぱら強形態素であり、そのゆえに「非相称的 asymmetrical」母音調和(Aoki 1968)と呼ばれることがある。この点では、アルタイ諸語などに見られるように、母音調和は常に語幹から接辞に働き、どのグループの母音も母音調和の引き金になりうる「相称的 symmetrical」的な(Aoki 1968)ものとは性質を異にする。

- (3a) *əlləy-ə-n*      *oonʔə-nta-yʔe-Ø*  
 父-挿-絶単      ベリー-摘みに行く-3 単主-過去  
 「父はベリー摘みに行った」
- (3b) *əlləy-e*      *oonʔə-nta-nen-Ø*      *nenenə-Ø*  
 父-能      ベリー-摘みに行く-3 単主 3 単目-過去      子供-絶単  
 「父は子供のためにベリー摘みに行った」

ただし、すべての自動詞が他動詞の活用変化をし、受益を表す他動詞として機能するわけではない。どのような自動詞がそのような他動詞として機能するかについては、今の段階ではまだわかっておらず、その説明は今後の課題にしたい。

### 3.2. 他動詞語幹から自動詞語幹の派生

他動詞語幹から自動詞語幹の派生には二種類の方法がある。つまり、逆使役(anticausative)と逆受動(antipassive)である。前者の逆使役はあまり生産的ではないが、他動詞語幹に接尾辞-et が付加することによって生じるプロセスである。それによって動作主が完全に消え、2 項動詞(動作者, 非動作者)から 1 項動詞(主体)へと、動詞の結合価に変化が起きる。

他動詞		自動詞	
<i>pela</i>	「残す」	<i>pela-et</i>	「残る」
<i>tejwəŋ</i>	「分ける」	<i>tejwəŋ-et</i>	「分けられる」

次の(4a)の他動詞文と(4b)の自動詞文を比較されたい。

- (4a) *yəm-nan*      *t-ə-pela-yʔan-Ø*      *ekək-Ø*  
 私-能      1 単主-挿-残す-3 単目-過去      息子-絶単  
 「私は息子を残した」
- (4b) *ekək-Ø*      *pela-t-yʔe-Ø*  
 息子-絶単      残す-自動詞化-3 単主-過去  
 「息子が残った」

逆使役と対照的なのは逆受動(antipassive)であるが、チュクチ語では他動詞語幹に接尾辞-tku, または接頭辞 ine-を付加することにより、自動詞語幹が派生されることがあるが、これが逆受動にあたる。

他動詞		自動詞	
ittil	「ぶつける」	ittil-tku	「(何かに) ぶつかる」
penr	「突進する」	penr-tku	「(何かのほうに) 突進する」
ejmit	「捕まる」	ine-ejmi	「(何かを) 捕まる」
piri	「つかむ」	ine-piri	「(何かを) つかる」
rlwet	「火をつける」	ine-rlwet	「(何かに) 火をつける」

構文的には、上で見た逆使役と対照的に、動作主が完全に消えるのではなく、絶対格に昇格し、意味上の目的語が斜格に降格しており、逆受動構文になる。

なお、チュクチ語では、逆受動構文が能格構文と異なった機能的振る舞いをする。具体的に言えば、能格構文の被動者が特定のもののに対し、逆受動構文の被動者は不特定である。

- (5a) *?ətt?e penr-ə-nen-Ø melota-lyən*  
 イヌ-能 追いかける-挿-3 単主 3 単目-過去 ウサギ-絶単  
 「イヌはウサギを追いかけた」
- (5b) *?ətt?ə-n penr-ə-tko-y?e-Ø melota-ytə*  
 イヌ-挿-絶単 追いかける-挿-逆受動化-3 単主-過去 ウサギ-方向  
 「イヌはウサギのほうへ追いかけた」
- (6a) *?ətt?əqej-e piri-rk-ə-nin-Ø tekisy-ə-n*  
 イヌ-能 つかむ-現在-挿-3 単主 3 単目-過去 肉-挿-絶単  
 「イヌは肉をつかんだ」
- (6b) *?ətt?əqej-Ø ine-piri-rkən tekisy-ə-k*  
 イヌ-絶単 逆受動-つかむ-現在 肉-挿-所  
 「イヌは(ある)肉をつかんだ」
- (7a) *tumy-e nely-ə-n rələwen-nin-Ø*  
 友人-能 毛皮-挿-絶単 火をつける-3 単主 3 単目-過去  
 「友人は毛皮に火をつけた」
- (7b) *tumyətum-Ø ine-nləwet-y?e-Ø*  
 友人-絶単 逆受動-火をつける-挿-3 単主-過去  
 「友人が(何かに)火をつけた」

(5a)は能格構文であり、主語 ?ətt? 「イヌ」は能格、目的語 melota 「ウサギ」が絶対格を取っている。これに対し、(5b)は逆受動構文である。述語動詞 penr 「追いかける」に逆受動の接辞-tko か付加され、主語 ?ətt? 「イヌ」絶対格へ昇格し、意味上の目的語 melota 「ウサギ」が斜格（この例では方向格）に降格し、動詞にとって必須の項からはずされ、いわば副詞的な役割を担うようになっている。(6a)は構造的に(5a)と全く同じく、能格構文である。(6b)は(5b)と違って、意味上の目的語 tekisy 「肉」が方向格ではなく、所格に降格している。このように降格した名詞句が方向格をとるか所格をとるかは述語動詞の意味によって決まるようである。一方、(7a)と比べればわかるように、(7b)では意味上の目的語がなくなり、項として現れていないが、その原因が今のところ分かっていないが、今後の課題にしたい。

### 3.3. 共通語根から自動詞語幹、他動詞語幹の派生

ある種の共通語根に接尾辞-et, -ew を付加すると自動詞語幹が派生され、接周辞 r...-et, r...-ew を付加すると他動詞語幹が派生される。

自動詞		他動詞	
ŋl-et	「燃える」	r-ŋl-ew	「燃やす」 (< ŋl 「煙」)
pyɣy-et	「沸く」	r-pyɣy-ew	「沸かす」 (< pyɣy 「泡」)
sim-et	「壊れる」	r-sim-ew	「壊す」 (< sim 「ばらばらな」)
mejŋ-et	「育つ」	r-mejŋ-ew	「育てる」 (< mejŋ 「大きい」)
mel-ew	「治る」	r-mel-ew-et	「治す」 (< mel 「晴れた」)
keŋ-et	「曲がる」	r-keŋ-ew	「曲げる」 (< keŋ 「曲がった」)
kkw-et	「乾く」	r-kkw-ew	「干す」 (< kkw 「乾いた」)
om-ew	「暖まる」	r-om-ew	「暖める」 (< om 「暖かさ」)

このような共通語根には名詞もあれば、形容詞もある。例えば、ŋl は「煙」を意味する名詞、pyɣy は「泡」を意味する名詞、mejŋ 「大きい」を意味する形容詞である。

- (8a)    *nənenə-Ø*        *mejŋ-et-yʔi-Ø*  
 子供-絶単        大きい-動詞化-3 単主-過去  
 「子供が育った」

- (8b)    *nənenə-Ø*        *t-ə-n-mejŋ-ek-wʔen-Ø*  
 子供-絶単        1 単主-挿-動詞化-大きい-動詞化-3 単目-過去  
 「私は子供を育てた」



感情動詞(verb of emotion)の場合は、形容詞語根から自動詞語幹と他動詞語幹が派生される。すなわち、形容詞語根に-et, または-ew が付加されると自動詞語幹が派生される。一方、他動詞語幹の多くは、形容詞語根に直接、様態格に由来する接尾辞-u が付加され、これと助動詞 lŋ を分析的に組み合わせることにより作られる。また、形容詞語根から派生された自動詞語幹に-u が付加され、これと助動詞 lŋ を分析的に組み合わせる「二重派生」も若干見られる。

自動詞		他動詞	
?enq-et 「嫌がる」		?enq-u lŋ 「(～を)嫌がる」	
( < ?enq 「嫌な」 )			
wis-et 「腹が立つ」		wis-u lŋ 「(～に)腹を立てる」	
( < wis 「腹立しい」 )			
metiw-et 「疑う」		metiw-u lŋ 「(～を)疑う」	
( < metiw 「疑わしい」 )			
kory-ew 「喜ぶ」		kory-ew-u lŋ 「(～を)喜ぶ」	
( < kory 「喜ばしい」 )			
wemen-et 「尊敬する」		wemen-u lŋ 「(～を)尊敬する」	
( < wemen 「尊い」 )			
jejwes-et 「憐れむ」		jejwes-u lŋ 「(～を)憐れむ」	
( < jeswes 「可愛そうな」 )			

次の 4 つの例のうち、(9a)と(10a)の他動詞文では、主語が能格、目的語が絶対格をとっているのに対して、(9b)と(10b)の自動詞文では、主語が絶対格に昇格し、意味上の目的語が斜格(この 2 例では与格)に降格しており、いわゆる「逆受動的な対応」になっている。

- (9a)    *ŋekkəqej-e*    *kory-aw-o*                    *ləy-nin-Ø*  
 女の子-能            嬉しい-動詞化-様態            助動詞-3 単主 3 単目-過去

*alose-lyən*  
 おもちゃ-絶単  
 「女の子が人形を喜んだ」

- (9b)    *ŋekkəqej-Ø*    *kory-ak-w?e-Ø*                    *alose-ytə*  
 女の子-絶単    嬉しい-動詞化-3 単主-過去            おもちゃ-与  
 「女の子が人形に対して喜んだ」

- (10a) *əlləy-e wis-u ləŋ-ə-rk-ə-nin*  
 父-能 腹立だしい-様態 助動詞-挿-現在-挿-3 単主 3 単目  
*əkək-Ø*  
 息子-絶単  
 「父は息子に腹立っている」
- (10b) *əlləy-ə-n wis-et-ə-rkən akka-ytə*  
 父-挿-絶単 腹立だしい-動詞化-挿-現在 息子-与  
 「父は息子に対して腹立っている」

#### 4. 動詞の使役と名詞項

チュクチ語では受動態はあまり使われないが、使役態が特に発達している。チュクチ語には3種類の使役構造が存在するが、このうち使役接辞による「形態的使役」が最も盛んに行なわれている。また、別種の接辞による使役化としては、動詞語幹に「作る」を意味する接周辞(circumfix) *te-...-ŋ* を付加することにより使役を表わすことができる。これは英語の *make* やフランス語の *faire* による分析的使役表現と意味的には対応している。「分析的使役」としては、自立動詞語幹に使役の接辞 *-jyt* をつけ、さらに助動詞 *rt* と組み合わせたものがある。さらに「死ぬ」—「殺す」, 「勝つ」—「負ける」, 「売る」—「買う」といった、相互に形態的な関係のない異根動詞をなす「語彙的使役」も数例確認されている。

##### 4.1. 自動詞, 他動詞と使役動詞

チュクチ語では使役動詞を派生するのに、自動詞から他動詞の派生に用いられるのと同様の接辞, すなわち接周辞 *r-...-et*, *r-...-ew*, *r-...-ŋet* である。これはある意味では、動詞の他動性と使役性が密接な関係にあることをうかがわせる。

###### (1) *r-...-et*, *r-...-ew*

対応する他動詞を持たない、いわゆる無対の自動詞語幹に *r-...-et*, *t-...-ew* が付加されると、動詞が取りうる名詞項が一つ増え、使役動詞語幹が派生される。

自動詞		使役動詞	
<i>tkiw</i>	「泊まる」	<i>r-tkiw-et</i>	「泊まらせる」
<i>lqut</i>	「立つ」	<i>r-lqut-et</i>	「立たせる」
<i>jalyt</i>	「移動する」	<i>r-jalyt-et</i>	「移動させる」
<i>?ir</i>	「渡る」	<i>r-?ir-et</i>	「渡らせる」

ʔenqew	「満腹する」	r-ʔenqew-et	「飽和させる」
qametwa	「食べる」	r-qametwa-ew	「食べさせる」
loo	「吸う」	r-loo-ew	「吸わせる」
wakʔo	「座る」	r-wakʔo-ew	「座らせる」
puture	「踊る」	r-puture-ew	「踊らせる」

次の例(11)は自動詞文，(12)は使役文である。

- (11) *ekək-Ø jalyət-ʔe-Ø*  
 息子-絶単 移動する-3 単主-過去  
 「息子が移動した」

- (12) *ekək-Ø q-ə-n-jalyət-at-ʔən*<sup>4</sup>  
 息子-絶単 命令・2 単主-挿-使役-移動する-使役-2 単主 3 単目  
 「あなたは息子を移動させなさい」

(2) r...-ŋet

この接辞を他動詞語幹（2 項動詞）に付加すると，使役性の 3 項動詞が派生される。

他動詞	使役動詞
jp 「着る，被る」	r-jp-ŋet 「着せる，被せる」
lʔu 「見る」	r-lʔu-ŋet 「見せる」
pl 「飲む」	r-pl-ŋet 「飲ませる」
ketʔo 「思い出す」	r-ketʔo-ŋet 「思い出させる」
yala 「通過する」	r-yala-ŋet 「通過させる」

- (13a) *t-ə-jp-ə-ʔʔan-Ø məsəkʷ-ə-n*  
 1 単主-挿-着る-挿-3 単目-過去 シャツ-挿-絶単  
 「私はシャツを着た」

- (13b) *t-ə-n-ə-jp-ə-ŋat-ʔʔan-Ø nanana-ʔtə*  
 1 単主-挿-使役-挿-着る-挿-使役-3 単目-過去 子供-与

*məsəkʷ-ə-n*  
 シャツ-挿-絶単  
 「私は子供にシャツを着せた」

<sup>4</sup> チュクチ語では，語頭に r がくる動詞語幹の前に形態素が接続する際，r が普通 n に交替する。

次の第5節で述べるように、チュクチ語では名詞が動詞に抱合されることがよく起こる。動詞が名詞を抱合する場合は、動詞語幹に使役接辞 *r-...-ŋet* が直接付加されず、抱合複合体に付加される。例えば、次の(13c)を(13b)と比較すればわかるように、直接目的語 *məsəkʷ* 「シャツ」が動詞 *jp* 「着る」に抱合され、その複合体に使役接辞が付加されている。

- (13c) *t-ə-n-məsəkʷ-ə-jp-ə-ŋat-yʔan-Ø* *nenenə-Ø*  
 1 単主-挿-使役-シャツ-挿-着る-挿-使役-3 単目-過去 子供-絶単  
 「私は子供にシャツを着せた」

チュクチ語では、一部の自動詞と他動詞は、相互に派生関係がない異根により区別される、一種の補充法が認められる。

自動詞		他動詞	
<i>uwi</i>	「茹でる」	<i>əpat</i>	「(～を) 茹でる」
<i>ikwisi</i>	「飲む」	<i>pl</i>	「(～を) 飲む」
<i>qt</i>	「行く」	<i>jt</i>	「(～に) 行く」
<i>wəŋe</i>	「縫う」	<i>tɲi</i>	「(～を) 縫う」
<i>yʔo</i>	「産む」	<i>jto</i>	「(～を) 産む」
<i>qametwa</i>	「食べる」	<i>ru</i>	「(～を) 食べる」
<i>llep</i>	「見る」	<i>yite</i>	「(～を) 見る」

次の(14a)は自動詞文、(14b)は他動詞文の例である。

- (14a) *rekwət-Ø* *yəʔo-yʔe-Ø*  
 メストナカイ-絶単 産む-3 単主-過去  
 「メストナカイが産んだ」
- (14b) *rekwət-e* *jəto-nen-Ø* *əswək-Ø*  
 メストナカイ-能 産む-3 単主 3 単目-過去 仔トナカイ-絶単  
 「メストナカイが仔トナカイを産んだ」

注意すべきなのは、異根動詞のペアである *ikwisi* 「飲む」と *pl* 「(～を) 飲む」から、それぞれ派生される *r-ikwisi-ew* 「飲ませる」と *r-pl-ŋet* 「飲ませる」は、ともに使役動詞ではあるが、前者は2項動詞、後者は3項動詞という、名詞項に関して相互に違いがある。以下の(15a)と(15b)を比較すれば、その違いがわかる。

(15a) *əlʔa-ta ekək-Ø r-ikwisi-w-nin-Ø*  
 母-能 息子-絶単 使役-飲む-使役-3 単主 3 単目-過去  
 「母は息子に飲ませた」

(15b) *əlʔa-ta akka-ɣtə r-ə-pl-ə-ŋen-nin-Ø*  
 母-能 息子-与 使役-挿-飲む-挿-使役-3 単主 3 単目-過去

*nəminəm-Ø*  
 スープ-絶単  
 「母は息子にスープを飲ませた」

このように、自動詞語幹と他動詞語幹が異根の場合は、自動詞語幹に接辞をつけて、意味的に対応する他動詞を派生させることは不可能だが、一方、使役動詞を派生させることは可能である。

(3) *te-...-ŋ*

本来「作る」を意味する語彙的接周辞 *te-...-ŋ* は、無対の自動詞語幹から使役動詞を派生する場合にのみ用いられる。ただし、*te-...-ŋ* は自動詞語幹に直接付加することはできず、まず他動詞化の接頭辞 *r-*をつけて、いったん他動詞化するプロセスを経たのちに付加される。

自動詞		使役動詞	
<i>ikwisi</i>	「飲む」	<i>te-r-ikwisi-ŋ</i>	「飲ませる」
<i>waje</i>	「縫う」	<i>te-r-waje-ŋ</i>	「縫わせる」
<i>kyntat</i>	「走る」	<i>te-r-kyntat-ŋ</i>	「走らせる」
<i>wakʔo</i>	「座る」	<i>te-r-wakʔo-ŋ</i>	「座らせる」
<i>jet</i>	「来る」	<i>te-r-jet-ŋ</i>	「来させる」
<i>tipʔejje</i>	「歌う」	<i>te- tipʔejje-ŋ</i>	「歌わせる」
<i>uwi</i>	「茹でる」	<i>te-uwi-ŋ</i>	「茹でさせる」

次の2例を参考されたい。(16)と(17)では、それぞれ *waje* 「縫う」と *jet* 「来る」にまず、*r-*が付加され、他動詞化し、その後に使役接辞 *te-...-ŋ* が付加されている。

(16) *əlʔa-ta ŋeekək-Ø ta-n-waje-ɣ-nen-Ø*  
 母-能 娘-絶単 使役-他動詞化-縫う-使役-3 単主 3 単目-過去  
 「母が娘に縫わせた」

- (17) *əkək-Ø t-ə-te-n-jen-ŋ-ə-y?en-Ø*  
 息子-絶 1 単主-挿-使役-他動詞化-来る-使役-挿-3 単目-過去  
 「私は息子を来させた」

ちなみに、Moreno (1993:155-158)によれば、ロマンス諸語、テルグ語、インドネシア語、タミル語など多くの言語で、英語の *make* 同様の「作る」を意味する自立動詞が使役を表わす統語的な用法を発達させている。機能的には、チュクチ語もこれと同様ではあるが、自立動詞ではなく、語彙的接辞が使役の機能を果たしている点が独特であるといえる。

#### (4) -jyut

-jyut は自動詞語幹、他動詞語幹のいずれにも付加される。自動詞語幹に-jyut を付加し、その後助動詞 *rt* と組み合わせることにより、意味的に対応する使役動詞が派生される。なお、この使役動詞の活用変化は助動詞 *rt* の部分で行なわれる。自動詞語幹から派生した使役表現には、被動者の意志を無視するという強制的な使役の意味合いが込められている。

自動詞		使役動詞		
wak?o	「座る」	wak?o-jyut	rt	「座らせる」
jet	「来る」	jet-jyut	rt	「来させる」
ikwisi	「飲む」	ikwisi-jyut	rt	「飲ませる」
jlqet	「眠る」	jlqet-jyut	rt	「眠らせる」
waje	「縫う」	waje-jyut	rt	「縫わせる」
winret	「手伝う」	winret-jyut	rt	「手伝わせる」
qametwa	「食べる」	qametwa-jyut	rt	「食べさせる」

- (18) *əll?a-ta waje-jyot rən-nin-Ø ŋeekək-Ø*  
 母-能 縫う-使役 助動詞-3 単主 3 単目-過去 娘-絶単  
 「母が娘に（むりやり）縫わせた」

- (19) *əkək-Ø qametwa-jyot t-ə-nt-y?en-Ø*  
 息子-絶単 食べる-使役 1 単主-挿-助動詞-3 単目-過去  
 「私は息子に（むりやり）食べさせた」

(18)は、統語的に(16)と同じ能格構文ではあるが、意味的には、相互に明確な違いがある。すなわち、(18)では、動作主の *əll?a* 「母」が非動者の *ŋeekək* 「娘」にむりやり「縫わせた」のに対し、(16)では、このような強制的な意味合いはなく、

使役の度合いが中立的である。次の(20a)と(20b)の関係も(18)と(16)の関係と同じである。

(20a) *ə-nan ikwisi-jyut ine-nt-ə-γʔi-Ø*  
 彼-能 飲む-使役 1 単目-助動詞-挿-3 単主-過去  
 「彼は私に (むりやり) 飲ませた」

(20b) *ə-nan ine-t-ine-n-ikwisi-ŋ-γʔi-Ø<sup>5</sup>*  
 彼-能 1 単目-使役-逆受動-他動詞化-飲む-使役-3 単主-過去  
 「彼は私に飲むように促した」

一方、他動詞語幹に-jyut を付加すると名詞項が一つ増え、3 項動詞になる。

他動詞		使役動詞		
ru	「食べる」	ru-jyut	rt	「食べさせる」
pl	「飲む」	pl-jyut	rt	「飲ませる」
swi	「切る」	swi-jyut	rt	「切らせる」
jme	「吊るす」	jme-jyut	rt	「吊るさせる」
tenti	「踏む」	tenti-jyut	rt	「踏ませる」
tm	「殺す」	tm-jyut	rt	「殺させる」
pela	「残す」	pela-jyut	rt	「残させる」
jp	「着る」	jp-jyut	rt	「着させる」
jt	「脱ぐ」	jt-jyut	rt	「脱がせる」
jaynat	「出迎える」	jaynat-jyut	rt	「出迎えさせる」
rpiŋkuw	「消す」	rpiŋkuw-jyut	rt	「消させる」

直接目的語のほかに間接目的語を必要とする次の 3 つの使役文を比較されたい。

(21) *əllʔa-ta jəme-jyot rən-nin-Ø ŋaakka-γtə<sup>6</sup>*  
 母-能 吊るす-使役 助動詞-3 単主 3 単目-過去 娘-与

<sup>5</sup> チュクチ語では、接頭辞 *ine-*が逆受動を表わす他に、1 人称単数目的語を表わすものとしても用いられる。

<sup>6</sup> 与格を表わす-*γtə* が強形態素であるため、母音調和の規則に従い、弱形態 *ŋeekke* 「娘」が強形態 *ŋaakka* に交替している。

*qoratʔol-Ø*

トナカイ肉-絶単

「母が娘にトナカイ肉を吊るさせた」

- (22) *əllʔa-ta*    *ŋeekək-Ø*    *jaynatə-jyot*    *rən-nin-Ø*  
 母-能      娘-絶単      出迎える-使役    助動詞-3 単主 3 単目-過去

*əlləy-ə-n*

父-挿-絶単

「母が娘に父を出迎えさせた」

- (23) *ekək-Ø*    *ru-jyut*            *t-ə-nt-ə-yʔen-Ø*  
 息子-絶単    食べる-使役      1 単主-挿-助動詞-挿-3 単目-過去

*kawkaw-a*

揚げパン-具

「私は息子に揚げパンを食べさせた」

(21)では、直接目的語 *qoratʔol*「トナカイ肉」が絶対格、間接目的語 *ŋaakka*「娘」が与格をとっているが、(22)と(23)はこれと事情が異なる。すなわち、(22)では意味上の間接目的語 *ŋeekək*「娘」が直接目的語 *əlləy*「父」と同格の絶対格をとっている。(23)では、意味上の間接目的語 *ekək*「息子」が絶対格へ昇格し、一方、意味上の直接目的語 *kawkaw*「揚げパン」が具格へ降格し、いわば副詞的な機能を果たすようになっている。

このように、同じ使役接辞-*jyut* が用いられるとはいえ、述語動詞によって、統語構造が異なることが見られる。

#### (5) *r-...-ew + -jyut*

対応する他動詞を持たない、いわゆる無対の自動詞語幹に使役の接辞 *r-...-ew* が付加されると名詞項が一つ増え、他動詞語幹が派生されるが、このような派生使役語幹に使役の接辞-*jyut* を付加すると、名詞項がさらに一つ増え、使役の2項動詞(AがBを~させる)から3項動詞(AがBにCを~させる)になり、二重使役動詞が派生される。

自動詞		使役動詞 (2 項)		使役動詞 (3 項)	
<i>jlqet</i>	「寝る」	<i>r-jlq-ew</i>	「寝かせる」	<i>r-jlq-ew-jyut</i>	rt
<i>teryet</i>	「泣く」	<i>r-terey-ew</i>	「泣かせる」	<i>r-terey-ew-jyut</i>	rt



puture	「踊る」	r-puture-w	「踊らせる」	r-puture-ew-jyut	rt
qametwa	「食べる」	r-qametwa-w	「食べさせる」	r-qametwa-ew-jyut	rt
ikwisi	「飲む」	r-ikwisi-w	「飲ませる」	r-ikwisi-ew-jyut	rt

次の2つの例では、直接目的語と間接目的語がともに絶対格をとっており、統語的には他動詞語幹からの使役文である(22)と同じである。

- (24) *əlləy-e*      *əkək-Ø*      *r-ə-jəlq-ew-ə-jyot*  
 父-能              息子-絶単          使役-挿-寝る-使役-挿-使役

*rən-nin-Ø*    *nenenə-Ø*  
 助動詞-3 単主 3 単目-過去 子供-絶単  
 「父が息子に子供の寝かしつけをさせた」

- (25) *əkək-Ø*      *r-ə-qametwa-w-ə-jyot*  
 息子-絶単      使役-挿-食べる-使役-挿-使役

*t-ə-nt-ə-yʔen-Ø*                              *epeqeʔ-Ø*              *kawkaw-a*  
 1 単主-挿-助動詞-挿-3 単目-過去      おばあさん-絶単      揚げパン-具  
 「私は息子におばあさんに揚げパンを食べさせるようにした」

#### 4.2. 使役と逆受動

##### (6) te-ine-...-ŋ

3.2で述べたように、チュクチ語では他動詞を自動詞化する、いわゆる「逆受動化」に *ine-* という接頭辞が用いられるが、使役動詞の派生にもこの *ine-* が用いられることがある。

上で述べたように、無対の自動詞語幹に接周辞 *te-...-ŋ* を付加し使役動詞を派生するためには、まず *r-* を付加し、他動詞化する必要がある。これに対して、逆使役化を行なう際は、まず自動詞語幹に *r-* を付加し他動詞化させたのち、*ine-* を付加して再自動詞化し、最後に *te-...-ŋ* を付加することによって派生され、形態的には逆受動であるが、機能的には使役の意味を成している。

自動詞		使役動詞	
jet	「来る」	te-ine-r-jet-ŋ	「来させる」
jlqet	「眠る」	te-ine-r-jlqet-ŋ	「眠らせる」
ikwisi	「飲む」	te-ine-r-ikwis-ŋ	「飲ませる」

waje	「縫う」	te-ine-r-waje-ŋ	「縫わせる」
qametwa	「食べる」	teine-r-qametwa-ŋ	「食べさせる」

この二種類の接辞が付加された使役動詞には、前述の-yjut を用いた使役動詞のような強制的な意味合いがなく、逆に主体の意志を尊重する意味合いが含まれる。

- (26) *əlləy-ə-n*      *t-ine-n-jen-ŋ-ə-rkən*      *akka-ytə*  
 父-挿-絶単    使役-逆受動-他動詞化-来る-使役-挿-現在    息子-与  
 「父が息子に来るように促している」

- (27) *əllʔa-Ø*      *t-ena-n-waje-ŋ-yʔe-Ø*      *ŋaakka-ytə*  
 母-絶単    使役-逆受動-他動詞化-縫う-使役-3 単主-過去    娘-与  
 「母が娘に縫うように促した」

(27)では、前述の(18)とは異なり、主語の「母」が絶対格をとっているのに対し、目的語の「娘」が降格して与格をとり、動詞は自動詞活用をし、逆受動構文になっている。しかし、機能的には(27)は使役文ではあるが、(18)と違って、「母」が「娘」に対して、「むりやり縫わせる」のではなく、「縫うように促す」という主体の意志を尊重する意味合いが含まれている。

### 5. 名詞抱合と動詞の結合価

チュクチ語は複統合的言語であり、語幹合成の一種である名詞抱合は形態法を特徴づける重要な手法の一つである。動詞語幹に対して様々な統語関係をもつ名詞語幹が抱合されるが、目的語の抱合が一番多く見られる。動詞に目的語が抱合されることにより動詞の結合価に変化が起きる。すなわち、名詞項が一つ減り、他動詞は自動詞活用をするが、分析形で能格をとっていた他動詞主語が昇格して絶対格をとる。次の例を(28a)と(28b)を比較されたい。

- (28a) *kətəjy-a*    *jara-ŋə*      *ya-npeqetaw-len-Ø*  
 風-能      家-絶単      過去-倒す-3 単目-3 単主  
 「風が家を倒した」

- (28b) *kətəjy-ə-n*      *ya-jara-npeqetaw-len*  
 風-挿-絶単      過去-家-倒す-3 単主  
 「風が家を倒した」

(28a)の分析的表現では、主語 *kətəjy* 「風」が能格、目的語 *jara* 「家」が絶対格をとっている。これに対し、(28b)では目的語 *jara* 「家」が動詞 *npeqetaw* 「倒す」に抱合されたため、名詞項が一つ減り、意味上の目的語 *kətəjy* 「風」が絶対格へ昇格し、動詞が自動詞活用するようになった。

もし、述語動詞が直接目的語と間接目的語両方をとる場合は、直接目的語のみが動詞に抱合される。その際、分析形で与格をとる間接目的語が絶対格へ昇格するが、動詞が他動詞活用する点では変わらない。次のような授与動詞の抱合を参照されたい。

(29a) *əllʔa-ta nanana-ytə<sup>7</sup> jəl-nin-Ø miməl-Ø*  
 母-能 子供-与 やる-3 単主 3 単目-過去 水-絶単  
 「母が子供に水をやった」

(29b) *əllʔa-ta nananə-Ø miml-ə-jəl-nin-Ø*  
 母-能 子供-絶単 水-挿-やる-3 単主 3 単目-過去  
 「母が子供に水をやった」

(29a) の分析形では、直接目的語 *miməl* 「水」は絶対格をとり、間接目的語 *nanana* 「子供」は与格をとっているが、一方、(29b)では直接目的語 *miml* 「水」が動詞に抱合されたので、項が一つ減っただけでなく、意味上の直接目的語 *nenenə* 「子供」は絶対格へ昇格し、いわば直接目的語に相当する振る舞いをするようになっている。

## 6. まとめ

本稿では、チュクチ語の動詞を結合価の変化の視点から概説した。具体的に言えば、動詞の他動性の変化、使役化、逆受動化などのプロセスが動詞の結合価とどのように関わるかについて記述を行なった。また名詞抱合と動詞の結合価についても簡単に触れた。全体をまとめると次のようになる。

1) 使役性が動詞のとり名詞項の増減をめぐる他動性とも密接にかかわってことを反映して、チュクチ語の使役動詞の派生には自動詞、他動詞の派生に用いられるいくつかの接辞が同様に用いられる。

2) チュクチでは使役接辞による「形態的使役」が最も盛んに行なわれているが、これには、動詞語幹に1種類の接辞がつく「単純使役」、2種類の接辞がつく「二重使役」がある。また、他動詞から自動詞の派生として、逆受動と逆使役も見られる。

<sup>7</sup> この例では、与格の接辞-*ytə* は強形態のため、弱形態の *nenene* が強形態 *nanana* に交替している。

3) 使役接辞の種類により、被動者の意志を尊重する意味合いをもつ場合と、意志を無視した「強制」の意味合いをもつという違いが生じることがある。

4) 他の言語では分析的使役として自立動詞によって行なわれるものが、チュクチ語では語彙的接辞によって表される。

5) 名詞抱合はチュクチ語の形態法を特徴づける重要な手法の一つでもある。とりわけ、目的語の抱合が一番多く見られる。動詞に目的語が抱合されることにより、項が一つ減り、動詞の結合価に変化が起きる。

### 略号

本稿で用いる省略記号は次の通りである。

1=1 人称	主=主語
2=2 人称	目=目的語
3=3 人称	具=具格
単=単数	与=与格
複=複数	絶=絶対格
能=能格	所=場所格
方向=方向格	挿=挿入母音

### 母音

Close	<i>i</i> [i]	<i>u</i> [u]
Close Mid	<i>e</i> [e]	
Open Mid	<i>ə</i> [ə]	<i>o</i> [ɔ]
Open		<i>a</i> [a]

### 本研究のデータについて

本研究のデータは、1995年から2009年の間に、筆者自身が現地調査を通じて収集したものである。調査地は、ロシア連邦チュクチ自治管区チャウン地区のウスティ・チャウン村、自治管区の中心地の市(Anadyr)、モスクワ州セルブホヴ地区の中心地セルブホヴ市(Serbuhov)およびサンクト・ペテルブルグ市である。聞き取り調査は、主に以下のチュクチ語話者の協力を得て行った。

**Geutwali Klavdiya** (女性) 1932年チュクチ自治管区チャウン地区生まれ。両親はいずれも同地区の出身である。2000年10月没。

**Valentine Yevur** (女性) 1963年チュクチ自治管区チャウン地区生まれ。両親はいずれも同地区の出身である。マガダン市にある教育大学の5年間を除けば、同自治管区チャウン地区で暮らし、現在に至る。

Margarita Balechenko (女性) 1945年チュクチ自治管区プロヴェデンスキ地区生まれ。地元で中学校を卒業してから、アナディリ市の師範学校に進学。卒業後地元に戻り数年間勤め、その後アナディリ市に移り住み、現在に至る。

Larisa Kutgeut (女性) 1958年チュクチ自治管区チャウン地区生まれ。地元で中学校を卒業してから、結婚のため Sumbawa Besar 郊外の村 Desa Pungka に移り、

Alla Petrovna (女性) 1943年チュクチ自治管区アナディリ地区生まれ。地元で中学校を卒業してから、アナディリ市の師範学校に進学。卒業後サンクト・ペテルブルグ(St. Petersburg)教育大学で4年間勉強。その後30年以上アナディリ市に住み、チュクチ語の新聞の編集者として勤務。1999年の年末に定年退職し、モスクワ州セルブホヴ地区の中心地セルブホヴ市に移り住み、現在に至る。

## 参 考 文 献

- Aoki, H. 1968. "Toward a Typology of Vowel Harmony". *International Journal of American Linguistics* 34 (2). pp. 142-145.
- 奥津敬一郎. 1995. 「自動化・他動化および両極化転形—自・他動詞の対応—」. 須賀一好・早津恵美子 (編) 『動詞の自他』. 東京: ひつじ書房. pp. 57-81.
- Comrie, B. 1992. "Causative". In W. Bright (ed.), *International Encyclopedia of Linguistics*. New York/ Oxford: Oxford University Press. pp. 231-233.
- Comrie, B. & M. Polinsky (eds.). 1993. *Causatives and Transitivity*. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.
- Dixon R. M. W. & Alexandra Y. Aikhenvald (ed.). *Changing Valency: case studies in transitivity*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Inenlikej, P. I. & V. P. Nedjalkov & A. A. Xolodovič. 1969. "Kauzativ v Čukotskom jazyke". In Xolodovič, A.A. (ed.), *Tipologija kauzativnyx konstrukcij: Morfologičeskij kauzativ*. Leningrad: Izdatel'stvo Akademii nauk SSSR. pp. 260-269.
- Koptjevskaja-Tamm, M. & I. A. Muravyova. 1993. "Alutor causatives, noun incorporation, and the Mirror Principle". In B. Comrie. & M. Polinsky (eds.), *Causatives and Transitivity*. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins. pp. 287-313.
- Kozinsky, I. Š & V. P. Nedjalkov & M. S. Polinskaja. 1988. "Antipassive in Chukchee: oblique object, object incorporation, zero object". In M. Shibatani (ed.), *Passive and Voice*. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins. pp. 651-706.
- 呉人徳司 [特古斯]. 1995. 「チュクチ語西部方言の音韻論」. 『言語学研究』第14号. 京都大学言語学研究会. pp. 165-197.
- . 1997a. 「チュクチ語の自動詞・他動詞の形態的対応」. 宮岡伯人・津曲敏郎編『環北太平洋の諸言語』第3号. 京都大学大学院文学研究科. pp. 97-112.
- . 2001b. 「チュクチ語の使役動詞の輪郭—自動詞・他動詞との関わりを通じて—」. 『アジア・アフリカ言語文化研究』61. pp. 129-148.
- Kurebito, Tokusu. 2001a. "On Lexical Affixes in Chukchi". In O. Miyaoka & F. Endo (Eds.), *Languages of the North Pacific Rim*, Vol. 6. Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University, Japan. pp. 65-83.

- . 2008. “Valency-changing in Chukchi”. In T. Kurebito (ed.), *Linguistic Typology of the North*, Vol.1. Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies. pp.73-86.
- Mal'tseva, A. A. 1998. *Morfologija glagola v Aljutorskom jazyke*. Novosibirsk: Sibirskij xronograf.
- Moreno, J. C. 1993. “‘make’ and the semantic origins of causativity: a typological study”. In B. Comrie & M. Polinsky (eds.), *Causatives and Transitivity*. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins. pp.155-164.
- Moll, T. A. & P. I. Inenlikey. 1957. *Čukotsko-russkij slovar'*. Leningrad: Gosudarstvennoe ucebno-pedagogičeskoe izdatel'stvo ministerstva procbeššenija RSFSR Leningradskoe otdelenie.
- 仁田義雄（編）. 1991. 『日本語のヴォイスと他動詞』. 東京：くろしお出版.
- Skorik, P. Ja. 1977. *Grammatika Čukotskogo jazyka*. Leningrad: Izdatel'stvo Akademii nauk SSSR.